

張籍詩訳注(4)

「征婦怨」「白紵歌」

畑村 学
橘 英範

The Translation and Annotation of the Verses Which Zhang Ji Wrote (4)

Manabu HATANURA
Hidenori TACHIBANA

本篇には、7「征婦怨」・8「白紵歌」(ともに巻一)の訳注を掲載する。

7 征婦怨

【題解】

出征兵士の妻の怨み。『楽府詩集』巻九四に、唐代に入って新たに制作された「新楽府辞」として、同じ中唐の孟郊の四首とともに載録される。

張籍に「○○怨」と題する詩が多いことは、3「雜怨」の【題解】で指摘したが、同じ特徴は孟郊にも言え、孟郊には「古楽府雜怨三首」「古怨」「湘絃怨」「湘妃怨」「楚怨」「閑怨」がある。このうち張籍には、「征婦怨」以外にも、3「雜怨」、437「楚妃怨」が孟郊と共通する。ともに韓愈グループに属する二人の関係を見ていく上で、この傾向はひとつのキーワードになるのではなからうか。ここで思い出すのは、張籍が韓愈に知遇を得る前にいち早くその才能を認め、韓愈に紹介したのが孟郊だったことである。貞元十二年(796)、科挙進士科に登第した孟郊は、湖州(今の浙江省徳清県)に帰省する途中、張籍のいる和州(今の安徽省和県)を訪れている。その際に張籍が

孟郊に贈った詩が、456「贈孟郊」(巻七)である。また、孟郊が、当時宣武軍觀察推官として汴州(今の河南省開封)に赴任していた韓愈に張籍を紹介したことについては、韓愈「此日足可惜一首贈張籍」(錢仲聯『繫年集釈』巻一)に、「念昔未知子、孟君自南方。自矜有所得、言子有文章」(念う昔未だ子を知らざりしとき、孟君南方よりし、自ら得る所有るを矜り、子に文章有るを言う)と詠われている。張籍と孟郊の楽府については、今後も注意して見ていきたい。

「征婦」とは、「征人・征夫の婦」を短縮した言い方であるが、「征人」「征夫」が詩文に早くから見られることばであるのに対し、「征婦」は、孟郊や張籍ら、中唐の詩人によって新たに使われ始めることばである。例えば、同時代の元稹「生春」二十首其七(冀勤点校『元稹集』巻一五、中華書局)には、「病翁閑向日、征婦懶成風」(病翁閑かに日に向かい、征婦懶ることを成す)と、下句に、夫が長い間出征しているためにだらだらした生活

畑村 学 宇部工業高等専門学校一般科講師
橘 英範 岡山大学文学部言語文科学科助教授

一九九九年九月二十四日受理

が習慣となった妻が詠われる。

詩題に「征婦」を用いたものには、同じ中唐の施肩吾に「代征婦怨」(『全唐詩』巻四九四)、五代から北宋にかけての詩人劉兼に「征婦怨」(同巻七六六)、また馬戴に「征婦歎」(同巻五五六)がそれぞれあるが、いずれも『樂府詩集』には採録されていない。

なおこの詩は、久保天随『古詩評釈』、松浦友久編『校注唐詩解釈辞典』(大修館、一九八七年、担当鈴木義昭氏)に採録されており、『語釈』や『補』のところで参照した。

【押韻】

将・上―去声四一漾、葬―去声四二宕(同用)

夫―上平一〇虞、舒―上平九魚(独用)

腹―入声一屋、燭―入声三燭(独用)

※「夫」と「舒」、「腹」と「燭」は、『広韻』では同用の範囲ではないが、所謂古詩通押で、押韻しているものと考えられる。

【本文・書き下し文】

- 1 九月匈奴殺邊將 九月 匈奴 辺將を殺し
- 2 漢軍全没遼水上 漢軍 遼水の上ほらうに全没す
- 3 萬里無人收白骨 万里 人の白骨を収むる無く
- 4 家家城下招魂葬 家家 城下にて 魂を招きて葬る
- 5 婦人依倚子與夫 婦人 子と夫とに依倚し
- 6 同居貧賤心亦舒 同居に貧賤に居れば 心も亦た舒ぶ
- 7 夫死戰場子在腹 夫は戰場に死して 子は腹に在り
- 8 妾身雖存如畫燭 妾身 存すと雖も 昼の燭の如し

【口語訳】

- 1 九月 匈奴が辺境防衛の將軍を殺したため
- 2 漢の軍隊は 遼水のほとりで全滅した
- 3 万里の彼方まで うち捨てられたままの白骨が散らばり
- 4 家々では市街で 招魂の葬儀を行った
- 5 妻というものは 子と夫を頼りとし
- 6 貧しくとも一緒に暮らせば 気持ちもまたのびのびするもの

- 7 今 夫は戦場で死に 子はまだお腹の中
- 8 わが身は存在していても 昼間のともしび同然 無きに等しい

【語釈】

- 1・2 九月匈奴殺邊將、漢軍全没遼水上

〔九月〕 季秋九月の月で、秋は匈奴が力をつけて中国に攻め入ってくる季節である。『漢書』李広伝附李陵の伝に、「方秋匈奴馬肥、未可与戰」(秋に方りて匈奴馬肥え、未だ与に戦うべからず)とある。

〔匈奴〕 中国古代に存在した北方の遊牧民族。漢王朝は匈奴との間に和平条約を結んでいたが、前漢の武帝の時、武力で撃破する政策に転じ、衛青、霍去病らの將軍が大軍を率いてしばしば進軍するが、ついに侵入を阻止するに至らず、結果多額の軍事費により国力は疲弊した。匈奴については、『史記』『漢書』に匈奴伝がある。

〔辺將〕 国境を防衛する軍隊の指揮官。『後漢書』陳龜伝に、「陳龜字叔珍、上党汝氏人也。家世辺將、便習弓馬、雄於北州」(陳龜 字は叔珍、上党汝氏の人なり。家は世よ辺將にして、便ち弓馬を習い、北州に雄たり)とある。詩では、六朝には用例が見当たらないが、唐詩には頻出する。一例として、李白「贈張相鎬二首」其二(王注本巻一一)に、「本家隴西人、先為漢辺將。功略蓋天地、名飛青雲上」(本家 隴西の人、先ず漢の辺將と為る。功略 天地を蓋い、名は青雲の上に飛ぶ)とある。

張籍にこの他二例。63「送流人」(巻二)に、「流名属辺將、旧業作公田」(流名 辺將に属するも、旧業 公田を作る)、344「涼州詞三首」其二(巻六)に、「辺將皆承主恩沢、無人解道取涼州」(辺將 皆 主の恩沢を承くるも、人の解く涼州を取ると道うもの無し)。

〔漢軍〕 文字通り漢朝の軍隊を言うが、ここでは唐朝の軍隊を指す。これについては『補』を参照。漢の軍隊というもとの意味では、『漢書』趙充国伝に、「武帝時、以仮司馬從貳師將軍擊匈奴、大為虜所困。漢軍之食數日、死傷者多」(武帝の時、仮司馬を以て貳師將軍に従い匈奴を撃つも、大いに虜の困む所と為る。漢軍 食に乏しきこと数日、死傷する者多し)とある。

〔全没〕 全滅する。「没」を『唐文粹』(巻一一)は「歿」に作るが、音義と

もに同じ。

「遼水」川の名で、今の遼河のこと。遼寧省を南北に流れ、漢代、この川によって遼東・遼西の二郡に分けた。『漢書』地理志下、遼東郡望平県の説明に、「大遼水出塞外、南至安市入海、行千二百五十里」(大遼水、塞外より出で、南のかた安市に至りて海に入り、行くこと千二百五十里なり)とあるように、塞外の匈奴の地から流れる。漢代、匈奴の侵入に頻繁に遭っていたのがこの川の流域の地である。『史記』匈奴伝に、元朔元年(前128)、將軍・韓安国がここで大敗した記事が見え、また孝文帝の時の記事には、「匈奴日已驕、歳入辺、殺略人民畜産甚多。雲中、遼東最甚、至代郡万余人」(匈奴日び已に驕り、歳ごとに辺に入り、人民畜産を殺略すること甚だ多し。雲中、遼東は最も甚だしく、代郡に至りては万余人なり)とあり、匈奴の侵略による被害の大きかった場所の一つとして、遼東が挙げられている。

文学作品に登場する「遼水」も、こうした辺境のイメージを備えており、例えば、梁の江淹「別賦」(『文選』卷一六)には、出征兵士とそれを見送る妻と母親の別れを記す中に次のように見える。

或乃辺郡未和、負羽従軍。遼水無極、雁山参雲。關中風暖、陌上草薰。日出天而耀景、露下地而騰文。鏡朱塵之照爛、襲青氣之烟燼。攀桃李兮不忍別、送愛子兮霑羅裙。

或いは乃ち辺郡未だ和せず、羽を負い軍に従う。遼水は極まり無く、雁山雲に参る。關中 風は暖かに、陌上 草は薫る。日天を出でて景を耀かし、露地に下りて文を騰ぐ。朱塵の照爛たるに鏡され、青氣の烟燼たるに襲らる。桃李を攀じて別るるに忍びず、愛子を送りて羅裙を霑す。東西の両端にあつて戦争が頻発する代表的な辺境の地として、雁門と並んで挙げられている。

3・4 万里無人収白骨、家家城下招魂葬

「万里無人収白骨」万里の彼方まで、戦死した兵士の白骨が、拾い集められることもなく散らばっている。

張籍が、この句を詠ずる際に必ずや想起したであろう表現に、陳琳「飲馬長城窟行」(『玉臺新詠』卷一)、「君独不見長城下、死人骸骨相撐拄」(君独り見ずや、長城の下、死人の骸骨 相撐拄するを)、王粲「七哀詩二首」其一(『文選』卷三三)、「出門無所見、白骨蔽平原」(門を出でて見る所無く、白骨 平原を蔽う)が考えられるが、とりわけ杜甫「兵車行」(『詳註』卷二)の有名な句、「君不見青海頭、古來白骨無人収。新鬼煩冤旧鬼哭、天陰雨濕

声啾啾」(君見ずや、青海の頭、古來 白骨 人の収むる無く、新鬼は煩冤し 旧鬼は哭し、天陰り雨濕るとき 声啾啾たるを)は、「白骨」「無人収」の語が共通していることから見ても、張籍の直接の典拠であると考えられる。

「家家」戦死者を出した家々。漢の楊雄「解嘲」(『文選』卷四五)に、「家家自以為稷契、人人自以為皋陶」(家家自ら以て稷契と為し、人人自ら以て皋陶と為す)とある。

詩では、六朝では用例が見当たらないが、唐詩には頻出し、張籍にもこの他九例ある。54「望行人」(卷二)に、「日日出門望、家家行客帰」(日日門を出でて望めば、家家 行客帰る)とあるのがその一例。

「城下」城壁の内側、城内。或いは文字通り城壁のもと。一般に、招魂の祭がどこで行われたかについては未詳。「家家」とあるから前者の可能性が高いが、張籍が、第7句の語釈に引く杞梁の妻の故事を強く意識しているのであれば、後者の意の方が相応しい。口語訳では城内の意味で解釈している。

「招魂葬」死者の魂を呼び寄せる葬儀。宋玉に「招魂」の作があるのがすぐに想起される。

「招魂」の葬儀については、『礼記』曲礼下に、「崩曰天王崩、復曰天子復矣」(崩ずるときは天王崩ずと曰い、復するときは天子復れと曰う)とあり、鄭玄注に「始死時呼魂辭也」(始めて死する時に魂を呼ぶ辞なり)と言う。また『礼記』喪大記には、「復、有林麓、則虞人設階。無林麓、則狄人設階」(復するに、林麓有るときは、則ち虞人 階を設く。林麓無きときは、則ち狄人 階を設く)、諸侯が死んで魂呼の礼を行う時に、その領地内に山林があれば、虞人にはしごを作らせて屋根に登る。領地内に山林がなければ、狄人にはしごを作らせて屋根に登る、と説明する。鄭玄の注に「復招魂復魂也」(復は招魂・復魂なり)。

『礼記』や『儀礼』の記述から、葬儀における儀式の一つとして、招魂が行われていたことがわかるが、張籍のこの詩では、戦死者の死体が無い場合に行われる葬儀を「招魂」と言っている。『唐詩解釈辞典』(先述)は、杜佑の『通典』卷一〇三「礼、凶」六三「招魂葬議」注に、「有人死而亡其屍者、為招魂葬……」(人の死する有るも其の屍の亡きときは、招魂の葬を為す……)を引用し、「人が死んで死体の得られない場合には「招魂葬」が行われたことが知られる」と述べ、『通典』の同じ箇所にも、「時人思帝(黄帝)葬其衣冠」とあるのを引いて、「一般の場合も死者が生前に愛用した衣服を祭壇に具えて、これを葬った。今日「衣冠塚」というのがそれである」と述べる。

5・6 婦人依倚子与夫、同居貧賤心亦舒
 「婦人」既婚の女性。「依倚」の語釈に引く『札記』『儀礼』参照。

「依倚」寄り添って頼りとする。『毛詩』周頌「載芟」に、「思媚其婦、有依其士」(思に其の婦を媚し、其の士を依する有り)とあり、張詩と同じく「婦」「依」と見えるが、古注(毛伝)では、「士」を「子弟」と解し、夫の意味で解釈してはいない。

梁の簡文帝「冬歌四首」(『玉臺新詠』卷一〇)其四に、
 一年漏將尽 一年漏 將に尽きんとするに
 萬里人未歸 萬里 人 未だ歸らず
 君志固有在 君が志は 固より在る有るも
 妾軀乃無依 妾が軀は 乃ち依る無し

とあり、女性が男性に「依」という表現が見える。

「依倚」という熟語としては、漢の辛延年「羽林郎詩」(『玉臺新詠』卷一)に、「依倚將軍勢、調笑酒家胡」(將軍の勢に依倚し、酒家の胡を調笑す)とあり、將軍の威勢をかさにきて、無礼な振る舞いをする奴僕の様子をこのことばで表現している。

中国古代の封建社会には、所謂「三従の義」があり、女性は家にあつては父に従い、嫁いでは夫に従い、夫が死んだら子に従った。『儀礼』葬服に、「婦人有三従之義、無專用之道。故未嫁従父、既嫁従夫、夫死従子」(婦人に三従の義有りて、専用の道無し。故に未だ嫁せざれば父に従い、既に嫁すれば夫に従い、夫死すれば子に従う)、また『札記』郊特性にも、「婦人従人者也。幼従父兄、嫁従夫、夫死従子」(婦人は人に従う者あり。幼くして父兄に従い、嫁して夫に従い、夫死すれば子に従う)とある。

張籍のこの詩では、寄る辺無き女性の境遇を表現するために、夫は戦死し、子供はまだお腹の中で頼りとはならないと詠われる。

〔貧賤〕貧乏。1「野居」注参照。

「心亦舒」心もののびのびとする。「心」と「舒」が結びつく例が、杜甫「五盤」(『詳註』卷九)に、「喜見淳樸俗、坦然心神舒」(喜び見る 淳樸の俗を、坦然として 心神舒ぶ)と見える。

こうした「舒」の用例は、張籍の1「野居」(卷一)に、「四肢漸寬柔、中腸鬱不舒」(四肢 漸く寬柔なるも、中腸 鬱として舒びず)とあった。

7・8 夫死戰場子在腹、妾身雖存如昼燭
 「夫死戰場子在腹」夫は戰場で死に、子供はまだ腹の中。婦人の置かれた悲劇的な境遇を詠う。「依倚」の語釈参照。

妊娠中であることを詠う第7句は、「腹」が韻字であるとは言え、非常に肉体的で生々しい表現であると言える。

普通、夫が戦死して妻が取り残された場合、頼りとすべき人が誰もいないと表現するのが一般的ではないかと思われる。例えば、戦死した夫の屍を前に哭泣し続け、それにより城壁をも崩したという有名な杞梁の妻の故事(『列女伝』貞順伝)は、次のようになっている。

(杞梁)殖戰而死。(中略)杞梁之妻無子。内外皆無五屬之親。既無所歸、乃就其夫之尸於城下而哭之。内誠動人、道路過者、莫不為之揮涕。十日而城為之崩。既葬曰、「吾何歸矣。夫婦人必有所倚者也。父在則倚父、夫在則倚夫、子在則倚子。今吾上則無父、中則無夫、下則無子。内無所依、以見吾誠。外無所倚、以立吾節。吾豈能更二哉。亦死而已」。遂赴淄水而死。

(杞梁)殖戰いて死す。(中略)杞梁の妻 子無し。内外に皆五屬の親無し。既に歸る所無く、乃ち其の夫の尸を城下に就きて之を哭す。内誠人を動かし、道路過ぐる者、之が為に涕を揮わざる莫し。十日にして城之が為に崩る。既に葬りて曰く、「吾 何れにか歸せん。夫れ婦人は必ず倚る所有る者なり。父在れば則ち父に倚り、夫在れば則ち夫に倚り、子在れば則ち子に倚る。今吾 上には則ち父無く、中には則ち夫無く、下には則ち子無し。内には依る所無きも、以て吾が誠を見さん。外には倚る所無きも、以て吾が節を立てん。吾 豈に能く更二せんや。亦た死するのみ」と。遂に淄水に赴きて死す。

杞梁の妻のことばは、「依倚」の語釈で引用した『札記』を踏まえるが、夫も子供も親族も誰もいないと、婦人の寄る辺無き境遇が記されている。有名な話なので張籍も知っていたであろうが、ここには「城下」「婦人」「倚」等、張詩と共通することばも見える。

杞梁の妻を張詩の女性と比較した場合、夫が戦場で死んだことは共通するが、違うのは、その屍の所在すらわからないこと(そのため招魂の葬儀を行う)、子供はいるがまだ妊娠中であるということである。夫の屍の所在がわからないというのはそれだけでも十分に悲劇であるが、この詩ではそれに加えて我が身の妊娠が加わっている。寄る辺無き杞梁の妻は、結局川に身を投げて死ぬわけだが、張詩の女性は、お腹に子供がいるため自死するわけにいかない。つまりこの女性は、夫が戦死したため夫婦愛を全うできないだけ

でなく、生まれてくる子供を一人で育てていかなければならぬため死ぬわけにもいかず、杞梁の妻と比べてより過酷で悲惨な状況にあると言えよう。

『玉臺新詠』には、出征した夫を思う妻の情を詠じた詩は数多くあるが、戦死者の妻の心情を詠じた詩はほとんど見当たらない。管見では、劉宋・王微「雜詩二首」其一(卷三)があるだけである。王微の詩に詠われる妻も、詩の結びに「待君竟不帰、収顔今就櫛」(君を待てども竟に帰らず、顔を収めて今 櫛に就かん)とあるように、杞梁の妻と同様、夫を失った後自殺している(「櫛」は墓地に植える樹)。男女の情愛がテーマとなる閨怨詩では、夫が戦死すれば愛する対象が存在しなくなるわけであるから、その愛を全うするために自死を選ぶのは最も強い愛情の表現と言えよう。しかし現実の社会では、戦死した夫には、妻だけでなく年老いた義父母や子供もいたわけで、残された家族の中心となったのは、やはり妻であったはずである。張籍の詩はそうした妻の悲惨で過酷な境遇を詠ずることで、戦争の悲劇を訴えているのであり、その点で六朝の閨怨詩とは大きく異なっている。

「征婦怨」と同じく、夫が不在の家族を残された妻が支えるという設定は、3「雜怨」(卷一)にも見えた。「妾身甘独歿、高堂有舅姑」(妾身 独り歿するに甘んずるも、高堂には 舅姑有り)、自分が死ぬのはかまわないが、義父母がいるためそういうわけにもいかなないと詠われている。

「妾身」我が身。3「雜怨」参照。「妾」は女性の一人称である。

「昼燭」明るい昼間に灯るともしび。輝きが乏しくて灯っているかはつきりしない。婦人の寄る辺なき境遇を比喻によって表現している。

「昼燭」ということは自体は、劉宋の鮑照「從庾中郎遊園山石室」(『集注』卷五)に、「幽隅秉昼燭、地牖窺朝日」(幽隅 昼燭を秉り、地牖 朝日を窺う)とあるが、この「昼燭」は、昼でも暗い園山の石室を照らすための実際の灯火のことである。この詩は『中晚唐詩叩彈集』にも採録されているが、編者の一人・杜庭珠は、「昼燭」に付した按語で陳の後主・叔室「自君之出矣六首」其二(『樂府詩集』卷六九)を引いており、そのなかでは「昼燭」が、張詩と同様、女性の心理・境遇を表現する比喻として用いられている。

自君之出矣 君の出でてより

房空帷帳輕 房空しくして 帷帳軽し

思君如晝燭 君を思いて 晝の燭の如く

懷心不見明 懷心 明かなるを見ず

愛する男性の去った後、沈んだまま晴れない気持ちに「晝燭」に比擬して

おり、張詩の意味するところとはやや異なるが、先例としては見逃せない表現である。

なお、この新奇な比喻表現については、錢鍾書氏が「張文昌詩」(『談藝錄』所収)において、仏典や、西欧に於ける同様の表現を多数指摘してくれている。

【補】

この詩の構成については、『唐詩解詠辞典』の「備考」に言及があり、1、4句が外征の説明、5、8句が征婦の告白と、前半と後半が截然と分かれることが指摘されている。ただ、久保天随も指摘するように(前掲『古詩評釈』、第4句が前後半の内容をつなぐ転換点となっており、後半は第4句によって導き出されていることも見逃せないであろう)。

構成について付言すれば、この詩では前半と後半の場面構成のコントラストが非常に鮮やかであり、前半四句は、杜甫の「兵車行」など、過去の同様のテーマの詩を踏まえて無謀な外征による軍隊の壊滅を詠い、後半四句は張籍の真骨頂であり、兵士の妻の悲惨な境遇を詠じている。特に結びの第8句は、女性の境遇が極めて警拔な比喻で表現されており、第7句と併せてこの詩の眼目となっている。

また、この詩の時代設定については、第1句「匈奴」、2句「漢軍」とあるように、舞台は漢代に設定されているが、実際は張籍の生きた唐代の、外征の悲惨さを諷刺したものと考えられる。唐王朝を漢王朝に準えることは、唐詩のなかではよく見られることであり、これについては小川環樹氏『唐詩概説』(岩波「中国詩人選集」)二二・二三頁に詳しく述べられている。

初唐から盛唐にかけて、唐王朝は、勢力を異民族の地まで拡大したために、周辺諸民族との衝突が絶えなかった。この詩に詠われる遼水周辺に目を向ければ、唐王朝は、朝鮮半島を統治するために、乾封三年(668)に平壤に安東都護府を置いている。ところが後に新羅によって唐の勢力が駆逐されると、安東都護府は儀鳳元年(676)には平壤から遼東に移される。そして同じ頃、契丹が遼西の地域を占領するに至ると、安東都護府は廃止され、唐は遼東地方の統治をあきらめざるを得なくなつた。『唐詩解詠辞典』(先述)では、「遼水」の解説で、常建「弔王將軍墓」の「今与山鬼隣、殘兵哭遼水」(今 山鬼と隣し、殘兵 遼水に哭す)の句を引き、「則天武后の神功元年(697)、契丹を相手に奮戦空しく討ち死にした王孝傑の事跡を詠んだが、張籍もこの件によつたのであろう」と説明する。

なお、王建に「渡遼水」「遼東行」の樂府があり、徐澄宇『張王樂府』の

解説では、前者は高句麗遠征の悲惨さを詠じた詩であるとする（原文は「高麗」に作る）。

また、沈徳潜『唐詩別裁集』（巻八）では、この詩を玄宗の辺境出兵を批判した有名な駢文、李華の「弔古戰場文」に準えており（李華「弔古戰場文」、篇中可云縮本）、このことについても久保天随が、特に張詩の前半部分が該当するとして、李華の文の表現を用いて張籍の詩を解説している。

（畑村）

8 白紵歌

【題解】

「白紵歌」は樂府題。『樂府詩集』巻五五五六「舞曲歌辭・雜舞」の条に、「晋白紵舞歌詩」、「宋白紵舞歌詩」、王儉の「齊白紵辭」、梁の武帝の「梁白紵辭」、劉宋の劉鑠の「白紵曲」、鮑照の「白紵歌」六首、湯惠休の「白紵歌」二首、梁の張率の「白紵歌」九首、梁の沈約の「四時白紵歌」（五首）、隋の煬帝の「四時白紵歌」（二首）、虞茂の「四時白紵歌」（二首）を収めている。このうち、鮑照の「白紵歌」については、佐藤大志氏の「鮑照の文学とその制作の場」（『中国中世文学研究』三〇号、九六年）に言及がある。

唐代の作品としては、崔国輔の「白紵辭」二首、楊衡の「白紵辭」二首、李白の「白紵辭」三首、王建の「白紵歌」二首、この詩、柳宗元の「白紵歌」（一首）、元稹の「冬白紵歌」（一首）を収める。

『宋書』樂志一に「又有白紵舞、按舞詞有巾袍之言。紵本吳地所出、宜是吳舞也。晋俳歌又云、皎皎白緒、節節為双。吳音呼緒為紵、疑白紵即白緒」（又た白紵舞有り、按ずるに舞詞に巾袍の言有り。紵は本 吳地の出だす所、宜しく是れ吳の舞いなるべし。晋の俳歌に又た云う、皎皎たる白緒、節節双と為す、と。吳音 緒を呼びて紵と為す。疑うらくは白紵は即ち白緒ならん）と説明している。

『南齊書』樂志には、周処の『風土記』の「吳黄竜中童謡云、行白君者追汝句驪馬。後孫権征公孫淵、浮海乘船。船、白也。今歌和声猶云行白紵焉」

（吳の黄竜中の童謡に云う、行白君なる者、汝が句驪の馬を追う、と。後孫権公孫淵を征せんとして、海に浮かび船に乗る。船は、白なり。今の歌和声に猶お行白紵と云う）という記述を引いている。当時の白紵歌に「行白紵」という囃子ことばがあることの由来を説明するエピソードのようである。

『樂府詩集』に引く『樂府解題』に、「古詞盛稱舞者之美、宜及芳時為樂。

其嘗白紵曰、質如輕雲色如銀、製以為袍餘作巾、袍以光軀巾扠塵」（古詞は盛んに舞う者の美を称し、宜しく芳時に及んで樂しみを為すべしとす。其の白紵を誉めて曰く、質は輕雲の如く、色は銀の如し、製して以て袍と為し餘りは巾と作す、袍は以て軀を光かし、巾は塵を扠う）とある。

『樂府詩集』はこの後『旧唐書』音樂志を引くが、ここではその元になった『通典』巻一四五「樂・雜舞曲」の条を引こう。そこには、『宋書』の一部を引用した後、「梁武帝又令（沈）約改其辭、曰有四時白紵之歌、約集所載是也。今中原有白紵曲、辭旨与此全殊」（梁の武帝 又た約をして其の辭を改めしめ、四時白紵の歌有りと言う、約の集に載する所 是れなり。今中原に白紵曲有り、辭旨 此と全く殊なる）という。

これらの記述からすると、本来吳の地方の舞曲であったものに、梁になつて「四時白紵歌」というバリエーションができたようである。『通典』によれば、唐では中原に「白紵曲」があり、これは「辭旨全殊」であるというが、『樂府詩集』に収められる唐代の「白紵辭」「白紵歌」の内容は、六朝の「白紵歌」等の内容を踏襲したものと思われ、以前のものと「全く殊なつた」ものであるとはいえないように思う。『通典』が記載しているのは、民間に行われていた同題の曲のことであろうか。

なお、「白紵」は白い麻布をいう。「紵」は「苧」に同じく、麻の一種。

【本文・書き下し文】

- 1 皎皎白紵白且鮮 皎皎たる白紵 白く且つ鮮かなり
- 2 將作春衣稱少年 將て春衣の少年に稱うを作る
- 3 裁縫長短不能定 裁縫の長短 定むる能わず
- 4 自持刀尺向姑前 自ら刀尺を持ちて 姑の前に向かう
- 5 復恐蘭膏汚纖指 復た 蘭膏の纖指を汚さんことを恐れ
- 6 常遣傍人收墮珥 常に 傍人をして 墮珥を收めしむ
- 7 衣裳着時寒食下 衣裳 着くる時 寒食の下
- 8 還把玉鞭鞭白馬 還た玉鞭を把りて 白馬を鞭たん

【口語訳】

- 1 しらじらとした白紵の布は 白くてあざやか
- 2 これで 若い夫にびつたり春の着物を作る
- 3 裁縫の長さを 決めることができず
- 4 ハサミと物差しを持って 姑に尋ねる

5 鬢の油が 細い指を汚すのをきらい
6 しょっちゅう そばの人に 落とした耳飾りを拾ってもらう
7 この衣を着るのは 寒食の日
8 夫は美しい鞭を持って 白馬を駆るのだ

【押韻】

鮮—下平二仙 年・前—下平一先(同用)
指—上声五旨 珥—去声七志

※『集韻』では忍止切(上声六止)の音があり、現在も第三声であるから、指と珥が押韻していると思われる。
下・馬—上声三十五馬

【語釈】

1・2 皎皎白紵白且鮮、将作春衣称少年

【皎皎】白い形容。『毛詩』『楚辞』等に古くから多くの用例がある。李冬生注の引く『毛詩』小雅「白駒」に「皎皎白駒、食我場苗」(皎皎たる白駒、我が場の苗を食む)という例は、白馬を形容したもの。『後漢書』楊終伝に引く終の書簡に「詩曰、皎皎練糸、在所染之」(詩に曰く、皎皎たる練糸、之を染むる所に在り、と)と逸詩を引くのは、このこと同じく織維について表現した例。注に「皎皎、白貌也」とある。

また、『宋書』樂志に引く晋の俳歌に、「白緒」を形容する例として見えた。【題解】参照。

張籍の「皎皎」の用例は他に一例、139「和裴司空以詩請刑部白侍郎双鶴」(卷二)に「皎皎仙山鶴、遠留閑宅中」(皎皎たり 仙山の鶴、遠く留む閑宅の中)という。白居易の飼っていた鶴について表現した例である。なお、白居易の鶴に関する論文としては、坂井多穂子氏に「白居易と鶴」(『人間文化研究科年報』第一三三号、奈良女子大学大学院人間文化研究科、九八年)があり、また小松英生氏にも「白居易と鶴」(岡村貞雄博士古稀記念『中国学論集』、白帝社、九九年)がある。

【白紵】白い麻布。【題解】参照。

張籍の「白紵(苧)」の用例は、他に二例。42「薊北旅思」(卷二)に「日日望郷国、空歌白苧歌」(日日 郷国を望み、空しく歌う 白苧の歌)という例は、楽府題としての用例。なお、張籍の出身地については、和州烏江の

人とする説と呉郡の人とする説の二説があるが、傅璇琮主編『唐才子伝校箋』第二冊(中華書局、八九年)張籍の項は呉汝煜氏担当)は、この「薊北旅思」の句を呉郡出身の例証の一つとして挙げる。

張籍のもう一例は、38「江南曲」(卷一)に「江南人家多橋樹、吳姬舟上織白苧」(江南の人家 橋樹多く、吳姫 舟上 白苧を織る)の句が見える。

【白且鮮】白くてあざやかである。衣服を「鮮」と表現する例としては、曹植「名都篇」(『文選』卷二七)に、「宝剑直千金、被服光且鮮」(宝剑 直千金、被服 光き且つ鮮かなり)とある。また、謝朓の「郡内登望」(『文選』卷三〇)に「誰規鼎食盛、寧要狐白鮮」(誰か鼎食の盛んなるを規らん、寧ぞ狐白の鮮かなるを要めん)というのは、白い衣類に関して「鮮」の文字を用いた例。

【将作春衣】「将」の字、李冬生注は「要」の意味(将にくせんとす)で解釈し、徐注は、「音姜、携来的意思」(将て)と注する。どちらでも解釈はできるであろうし、大きな差が生じるわけではないであろうが、ここでは後者に従った。楽府題である白紵が材料であることを強調することになると考えたからである。【題解】に引いた『樂府解題』所引「晋白紵舞歌詩」や、鮑照の「白紵歌六首」其一(『樂府詩集』卷五五、集では「代白紵舞歌詩」四首其一)の「吳刀楚製為佩褱、織羅霧縠垂羽衣」(吳刀 楚製 佩褱を為り、織羅 霧縠 羽衣を垂る)の句などにも、白紵を材料として強調する表現が見える。

【春衣】は春の服。ここでは、末尾二句からも分かるように、春の遊び着を指す。王融「古意二首」其一(『玉臺新詠』卷四)に「嚬容入朝鏡、思淚点春衣」(嚬容 朝鏡に入り、思淚 春衣に点ず)という用例がある。これは女性の衣類の例。王維の「送別」(趙本卷四)に「江淮度寒食、京洛縫春衣」(江淮 寒食を度り、京洛 春衣を縫う)というのは、後に出る「寒食」と関連して用いた例。また、杜甫の有名な「曲江二首」其一(『詳註』卷六)に「朝回日日典春衣、每日江頭尽醉歸」(朝より回り日日 春衣を典し、毎日 江頭 酔いを尽くして帰る)という句がある。

張籍には他に423「春江曲」(卷七)に「長干夫婿愛遠行、自染春衣縫已成」(長干の夫婿 遠行を愛し、自ら春衣を染め 縫いて已に成る)の句がある。これは、商人である夫が、春になって行商へと出発する準備を整えたことを表現する例である。

【称少年】李冬生注、「称」は「称心」(心にかなう)の意であるとし、徐注

は「相称」と注しており、(身体に) ぴったり合うの意で解しているようである。ここでは、心情をはっきりと表すことばがないので後者の意で解釈したが、もちろん、身体にぴったりであれば、その結果心になうことになる。

張籍が衣服について「称」の文字を用いる例はもう一例、55「送宮人入道」(卷二)に「名初出官籍、身未称霞衣」(名は初めて 官籍を出で、身は未だ 霞衣に称わず)という。これも基本的には、身体にぴったり合うことをいうであろう。

「少年」は青年。常見の語。3「雜怨」第3・4句にも見えた。ここでは夫を指している。陳注に引くように、梁の武帝の「梁白紵辞」二首其一(『樂府詩集』卷五五)に「朱糸玉柱羅象筵、飛瑄促節舞少年」(朱糸 玉柱 象筵に羅なり、飛瑄 促節 少年を舞わしむ)という句があり、「少年」の語が用いられている。ただ、これはダンスを踊る若い女性について用いた例。

この詩においては、末尾の二句からもうかがえるように、白馬に乗り颯爽と町を駆ける夫に対して「少年」と表現しており、いわゆる遊俠少年を意識したものであると思われる。

張籍の「少年」の用例は、詩題を含めて他に十五例。若い時期のこと一般を指して用いる例が最も多い。遊俠少年の意味での用例は、28「少年行」(卷一)に「少年從獵出長楊、禁中新拜羽林郎」(少年 獵に従い 長楊を出で、禁中 新たに拜す 羽林郎)という句がある。

3・4 裁縫長短不能定、自持刀尺向姑前

「裁縫」布を裁ち、縫うこと。古くは『周礼』天官・縫人の注に見える。陳注にも引くように、詩においては、鮑照の「代陳思王白馬篇」(『鮑參軍集注』卷三)に「僑裝多闕絶、旅服少裁縫」(僑裝 闕絶多く、旅服 裁縫少なし)という用例がある。

張籍には他に一例、34「妾薄命」(卷一)に「念君此行爲死別、对君裁縫泉下衣」(君が此の行を死別と爲すを念い、君に対して裁縫す 泉下の衣)の句がある。

「長短不能定」長さを決めることができない。「長短」は常見の語。ここでは衣服についていう。張籍の用例はこの一例のみ。

夫の服のサイズを決められないということについては、謝惠連の「擣衣」(『文選』卷三〇)に「腰帶準疇昔、不知今是非」(腰帶 疇昔に準うるも、知らず 今の是非なるを)の句がある。【補】に引いた賀裳「載酒園詩話」

参照。

「自持刀尺」「刀尺」はハサミと物差し。「古詩爲焦仲卿妻作」(『玉臺新詠』卷一)に「左手持刀尺、右手執綾羅」(左手 刀尺を持ち、右手 綾羅を執る)の用例がある。また、陳注に引くように、杜甫の「秋興八首」其一(『詳註』卷一七)にも「寒衣处处催刀尺、白帝城高急暮砧」(寒衣 处处刀尺を催す、白帝城高くして 暮砧急なり)と見える。

張籍の「刀尺」の用例はこれのみ。

「向姑前」姑の前に進み出る。姑に、衣服の長さをどのくらいにすればよいか、尋ねるのである。

この二句、衣服の長さが決められず、姑に尋ねる女性の姿が描かれる。徐注に、嫁姑の間柄の細かい描写であることを指摘する。そういった面もあるべきであろう。夫の衣服を作り慣れていないため、長さが決められないという点には、若妻のういしさが表現されていると思われる、自分で適当に作ったりせず、きちんと姑に尋ねてから作る点には、夫への愛情が表現されていると思われる。

5・6 復恐蘭膏汚纖指、常遣傍人收墮珥

「復恐蘭膏汚纖指」髪の毛が細い指を汚すのを恐れる。

「蘭膏」はもと、蘭で香りをつけた油。陳注に引く『楚辞』招魂に「蘭膏明燭、華容備些」という句があり、王注に「蘭膏、以蘭香煉膏也」という。詩においては、張華の「雜詩」(『文選』卷二九)に「朱火青無光、蘭膏坐自凝」(朱火 青くして光無く、蘭膏 坐るに自づから凝る)の例がある。

ここでは、次の句との関連からして、髪につける油、びんつけ油のことをいうのであろう。この意味の例としては、李冬生注にも引く唐の浩虚舟の「陶母截髮賦」(『全唐文』卷六二四)に「象櫛重理、蘭膏旧濡」(象櫛 重ねて理め、蘭膏 旧より濡れた)の句がある。浩虚舟は張籍と同時代の人物であり、中唐の頃からこの意味で詩文に登場するようになったことばのようである。

張籍には他にも一例、18「古釵嘆」(卷一)に「蘭膏已尽股半折、雕文刻様無年月」(蘭膏は已に尽き 股は半ば折れ、雕文刻様 年月無し)という。これも古いかんざしを詠じた詩であり、髪の毛の油の意の用例である。

「織指」は、細い指。美人の形容。嵇康の「琴賦」(『文選』卷一八)に「飛織指以馳驚、紛受轟以流漫」(織指を飛ばして以て馳驚し、紛受轟として以て流漫す)という例は、特に女性を意識した表現ではないようである。詩における用例としては、陸機の「日出東南隅行」(『文選』卷二八)に「馥馥芳袖揮、冷冷織指彈」(馥馥として 芳袖揮がり、冷冷として 織指弾づ)の句がある。これは美人を形容したもの。
張籍の「織指」の用例は、他にはない。

「常遣傍人」(傍人)はそばにいる人の意で解釈した。蔡琰の「悲憤詩二首」其一(『後漢書』列女・蔡琰伝)に「奄若壽命尽、旁人相寬大」(奄として寿命の尽くるが若きも、旁人 相寛大す)の句がある。「旁」は「傍」に同じ。杜甫の「九日藍田崔氏莊」(『詳註』卷六)にも「羞將短髮還吹帽、笑倩傍人為正冠」(羞ずらくは短髮を將て還お帽を吹かるるを、笑いて傍人に倩いて為に冠を正さしむ)という印象深い用例がある。

この「傍人」の語について、吉川幸次郎氏『杜甫詩注』第三冊(筑摩書房、七九年)は、「そばにいる人でもあろうが、今の口語ではひろく他人をいう」とし、梁の沈約の「黃淡思」(『樂府詩集』卷二五は無名氏の作とする)に「与郎相知時、但恐傍人聞」(郎と相知る時、但だ恐る 傍人の聞くを)という例がすでにその意味であり、杜甫のもう一例「堂成」(『詳註』卷九)の「旁人錯比揚雄宅、懶情無心作解嘲」(旁人 錯って比す 揚雄の宅、懶情にして 解嘲を作るに心無し)の例も他人の意であると指摘する。

ここでは字義通りに解釈しておいたが、張籍のもう一例、321「酬藤杖」(卷六)にある「倚来自覺身生力、每向傍人說得時」(倚り来りて自ら覺ゆ 身に力を生ずるを、毎に傍人に向かい 得る時を説く)の句も、他人の意味で解釈できる例であろう。

「收墮珥」(珥)は耳飾り、イヤリングと訳しておいた。李冬生注に引くように、『説文解字』玉部に「珥、瑱也、从王耳、耳亦声」と会意文字であることをいい、また「瑱、以玉充耳也」という。これに従えば耳飾りである。徐注は、かんざしとする。陳注に引く『史記』滑稽列伝の淳于髡伝に、「前有墮珥、後遺簪」(前に墮珥有り、後に遺簪有り)とある。これを『史記会注考証』では「簪」とともに「首飾」としており、髪飾りと解釈したようである。

具体的にどのようなものかの穿鑿よりも、この『史記』における使われ方を見ておこう。これは、男女が入り交じって酒を飲み戯れる、かなり乱れた宴席を描写した部分である。

これを承けて、謝朓の「夜聽妓」二首其二(『玉臺新詠』卷四)に「掛鉞報纓絶、墮珥答琴心」(掛鉞 纓の絶つに報い、墮珥 琴心に答う)の句がある。これは「触れなげ落ちん」風情の女性を詠じた二句である。唐詩においても、虞世南の「門有車馬客」(『全唐詩』卷三六)に「危弦促柱奏巴渝、遺簪墮珥解羅襦」(危弦促柱 巴渝を奏し、遺簪墮珥 羅襦を解く)の句がある。これも同様に、女性の媚態をなまめかしく描いた二句である。これらの用例からすると、このことばは、女性のなまめかしい様子を暗示したものであると思われる。

なお、当時の耳飾りとしては、隋の「金製獸面文耳飾」が、我が白鶴美術館に蔵せられている。また、唐代の「金耳飾」(陝西考古研究所蔵)が、九六年から九七年にかけて「大唐王朝の華一都・長安の女性たち」展にて公開された。

この二句、髪のおいが白い布を汚すことを恐れて、落とした「珥」をそばの人に拾ってもらおうことをいう。徐注にいうように、非常に細かい女性の所作を描写している。

前の二句を承けて、白紵で夫の衣服を作る女性の描写であるといえよう。白い衣服を汚さぬようにと気遣う点からは、夫に対する愛情が感じられ、落とした耳飾りを拾ってもらおうという細かな描写には、用例から明らかになつたように、若妻のなまめかしさが暗示されているようである。

7・8 衣裳着時寒食下、還把玉鞭鞭白馬

「衣裳着時」上半身に着るのが「衣」、下半身のものが「裳」。常見の語。陳注に引く『毛詩』唐風「山有樞」に「子有衣裳、弗曳弗婁」(子に衣裳有るも、曳かず 婁かず)と見える。

張籍の用例は他に五例、261「寒食看花」(卷四)に「酒汚衣裳從客笑、醉饒言語覓花知」(酒は衣裳を汚して 客の笑うに従い、酔いて言語饒く 花の知るを覓む)という例は、寒食と関連してこのことばを用いた例。205「哭胡十八遇」(卷四)に「送君帳下衣裳白、數尺墳頭柏樹新」(君を送りて 帳下 衣裳白く、數尺の墳頭 柏樹新たなり)という例は、ことと同じく白い衣裳を表現したのだが、この場合は喪服のようである。

同時代の王建の「春來曲」(『全唐詩』卷二九八)にも「可憐寒食街中郎、早起著得單衣裳」(憐れむべし 寒食 街中の郎、早起き 著け得たり 單の衣裳)といい、寒食の日に身につけた衣裳に着目した表現がある。

また、春の日の遊びに「白紵」を身につける例として、劉復の「春遊曲」

『全唐詩』卷三〇五に「裁衫催白紵、迎客走朱車」(衫を裁ちて 白紵を催し、客を迎えて 朱車を走らす)の句がある。ただし、これは女性が着る例のようだ。

「寒食下」「寒食」は冬至から数えて一〇五日目の日。火を使うことが禁じられ、冷たいものを食べる。由来や習俗については、『荆楚歲時記』(平凡社 東洋文庫)や中村喬氏『中国の年中行事』(平凡社、八八年)に詳しい。唐詩との関わりについては、植木久行氏『唐詩歳時記』(明治書院、八〇年)及びその全面補訂版(講談社学術文庫、九五年)に詳しい。黒川洋一氏ほか編『中国文学歳時記』春下(同朋舎、八八年)にも、「寒食」「寒食の夜」(以上、入矢義高氏執筆)「春の墓参」「小寒食」「新火を鑽る」「餽亮り」(以上、川合康三氏執筆)などの関連項目が収められている。

また、張籍と同時代の白居易については、平岡武夫氏に「白居易と寒食・清明」(『東方学報(京都)』第四一冊、七〇年。のち『白居易―生涯と歳時記』)に収録。朋友書店、九八年)がある。

寒食の詳細については、これらの優れた先行研究に譲ることとし、この詩を読む上では、寒食の墓参りがピクニックを兼ねた楽しい行事であったことを確認しておけばよいであろう。先に引いた張籍の「寒食看花」もその様子を詠じていた。楽しい行事の時には、新調した服でおしゃれをして出かけるものである。そのためにこの詩の女性は、夫の服を作つてやるのである。

陳注には韓翃の「寒食」(『全唐詩』二四五)を引くが、これは寒食を題材に皇帝の恩寵を承ける貴族を諷刺した意味があると思われる(植木氏前掲書補訂版八八頁参照)、この張籍の「白紵歌」の用例として引くのに最適の例とはいえないのではないだろうか。

なお、「下」の文字について、李冬生注が「寒食の時」の意味であるとすのりに対し、徐注は寒食以後の意味であり、三月の間着るのであると注している。寒食が楽しい行事であり、その時に合わせて新調の服をおろすと解釈すれば、寒食の時の意味でよいのではないか。先に挙げた王建の「春來曲」にも、寒食の日に、町の若者が朝早くから薄い服を着ている様子が描かれているが、これも寒食の日に合わせて春の服を着始めたことをいうのであろう。

「還把玉鞭」「玉鞭」はムチの美称。張説の「舞馬千秋万歳樂府詞三首」其三(『全唐詩』卷八七)に「遠聽明君愛逸才、玉鞭金翅引龍媒」(遠く明君の逸才を愛するを聴き、玉鞭 金翅 龍媒を引く)という用例がある。杜甫の「寄岳州賈司馬六丈巴州嚴八使君兩閣老五十韻」(『詳註』卷八)にも「貔虎開金甲、麒麟受玉鞭」(貔虎 金甲開き、麒麟 玉鞭を受く)の句がある。

張籍の「玉鞭」の用例はこれのみ。

「還」の文字は、「かえって」の意味で強く用いられているのではなく、「やはり」の意味で軽く用いられているのであろう。訳出はしなかったが、「やっぱりうちの旦那様は颯爽としている」というような語気ではないだろうか。

「鞭白馬」「鞭」の文字、先ほどは名詞であったが、ここでは動詞に用いている。

「白馬」は白い馬。よく用いられる語。ここでは夫の騎る馬を「白馬」としており、先の「少年」の語とともに、遊俠少年であることが暗示される。こういったニュアンスを含んだ用例としては、曹植の「白馬篇」(『文選』卷二七)を挙げるべきであろう。冒頭の四句に「白馬飾金羈、連翩西北馳。借問誰家子、幽并遊俠兒」(白馬 金羈を飾り、連翩として 西北に馳す。借問す 誰が家の子ぞ、幽并の遊俠兒)という。

唐詩においても、崔顥の「渭城少年行」(『全唐詩』卷一三〇)に「渭城橋頭酒新熟、金鞍白馬誰家宿」(渭城橋頭 酒新たに熟し、金鞍白馬 誰が家にか宿る)と、「少年」の春遊の様子を描写するのに「白馬」の語を用いている。陳注に引く劉長卿の「白馬翩翩春草細、郊原西去獵平原」(白馬翩翩として 春草細く、郊原西に去り 平原に獵す)の句は、「獻淮南軍節度使李相公」(『全唐詩』卷一五一)の句。

張籍の「白馬」の用例はこれのみ。
後の詞の例であるが、「少年」と「白馬」「玉鞭」を同時に用いた例を挙げれば、韋莊の「上行盃二首」其二(『全唐五代詞』卷五)に、「白馬玉鞭金轡、少年郎、離別容易、迢遞去程千里」という。

末尾の二句について、徐注に、民歌の口語を用いているのは、樂府の本色であるという指摘がある。どの用語について「民歌口語」としているのかよく分からないが、「還」の用法あたりであろうか。

この二句で換韻しているので、前の1〜6句の描写から時間が経過し、完成した後の寒食の時点での描写とも考えられるが、ここでは、自分が苦勞して作った春の着物を、寒食の時に着ている夫の姿を想像している結びとして解釈しておいた。女性が男性の衣服を作るとき、相手が来てくれたときのことを想像するのは、自然なことであろう。

【補】

この詩、押韻の上からは、1〜4/5・6/7・8と分かれるようである

が、内容からは次のような構成であるといえるだろう。
 1・2句―状況設定。若妻が夫のために白紵で着物を作ることが述べられる。
 3〜6句―妻の描写。中心となるのは、若妻の初々しさ・なまめかしさと夫への愛情である。
 7・8句―結び。自分の作った服を着た夫の姿を想像する。

この詩について、徐注は「古題新製」とし、「古題は、湯惠休の白紵歌のように、富貴の人の驕奢・享楽と舞女の苦痛を多く描いて、尖锐な対照を作り出している。この詩は、ただ一人の婦人が自分のために新しい服を作ることとを述べ、非常に細かく描写しているだけである。これが張王一派の特長なのである(古題多写富貴人家的驕奢享楽と舞女の苦痛、形成尖锐的対照、如湯惠休の白紵歌。本篇但寫一婦人為自己製新衣之事、写得極其細膩、是張王一派的特長)」と解説する。

これに対し、張修蓉の『中唐樂府詩研究』では、「古題古意」の作品に分類している。「晋白紵歌辞」などに白紵で衣服を作ることが描かれているからであろう。

確かに湯惠休の作品は、踊る女性の苦痛と貴族の驕奢との対比を描いたものといえるが、このような系統の作品が多く作られているとはいえないであろう。また、単に従来の作品を襲ったものとはばかりもいえないと思われる。

卑見によれば、「白紵歌」の樂府の系譜から考えると、この作品でより注目すべき点は、女性が白紵で作った衣服を、夫に着せようとするという点ではないかと思う。従来の白紵歌の中でも、例えば「晋白紵舞歌辞」や鮑照の「白紵歌六首」其一(集では「代白紵舞歌詞四首」其一)、李白の「白紵辞」三首其三、王建の「白紵歌二首」其一のように、白紵で衣裳を作るといふことは出てくるが、それは女性の踊りの衣裳として作られるものであり、作側のことはほとんど問題にされていない。

張籍はこの樂府題を用いながら、美しい若妻が愛する夫に対して作るという作品に仕上げたのである。従来の作品で踊りを踊っていた女性は、白紵で衣裳を作る役割となっている。

さらに、この詩の夫には、語釈の中で確認したように、遊俠少年のイメージが色濃く現れている。そのため、この夫は、手柄を立てるためにいつ辺境の戦争に加わるか分からない人物であるといえる。すなわち、この詩に描かれた女性は、将来、出征した夫を待つという状況に変わる可能性を秘めているといえる。

かくて、この女性は続稿で扱う予定の10「寄衣曲」(巻一)に描かれる女性へとつながって行くのである。

清の賀裳の「載酒園詩話」巻一「三儉」の条に、次のようにいう。

謝惠連擣衣詩曰、腰帶准嚙昔、不知今是非。至張籍白紵歌則曰、裁縫長短不能定、自持刀尺向姑前。裴說寄辺衣則曰、愁捻銀針信手縫、惆悵無人試寬窄。雖語益加妍、意實原本于謝。正子瞻所云、鹿入公庖、饌之百方、究其所以美也、總無加于煮食時也。然庖饌變換得宜、美亦可口。

謝惠連の擣衣の詩に曰く、腰帶 嚙昔に准うるも、知らず 今の是非なるを、と。張籍の白紵歌に至りては則ち曰く、裁縫の長短 定むる能わず、自ら刀尺を持ちて 姑の前に向かう、と。裴說の寄辺衣には則ち曰く、愁いて銀針を捻り 手に信せて縫い、惆悵す 人の寛窄を試みる無きを、と。語は益ます妍を加うと雖も、意は実に原と謝に本づく。正に子瞻の云う所の、鹿 公庖に入れば、之を饌すること百方なるも、其の美とする所以の処を究むれば、總べて煮食を加うる無き時なり。然れども庖饌の變換 宜しきを得れば、実に亦た口に可なり。

謝惠連の「擣衣詩」や裴說の「寄辺衣」といった閨怨の詩とともに、張籍の「白紵歌」が並べられているのも、この詩の女性の境遇が、いつでも出征した夫を待つ状態に変わりうることを、賀裳が感じ取ったからであるかもしれない。

この詩は『唐詩紀事』や『唐詩別裁集』にも見え、彼の代表作の一つとされているようである。上述のような新鮮さがあるために、代表作とされるのである。

なお、六朝の「擣衣」から張籍・王建らの「送衣曲」にいたる詩作品の系譜については、赤井益久氏「送寒衣―唐詩『送衣』をめぐって―」(『漢文学会々報』第三二輯、八七年)に詳しい。

【注】

①なお、李白の「湖邊採蓮婦」(王注本卷二五)に「小姑織白紵、未解將人語」(小姑 白紵を織る、未だ人と語るを解せず)とあり、若く貞淑な妻が白紵を織る描写があるが、樂府「白紵歌」の系統の作品ではなく、またこの白紵を織る婦人の描写は、詩の中心となるものとはいえないようである。

(橘)

【附記】本稿は「平成十一年度宇部工業高等専門学校内助成事業」による研究成果の一部である。